

Ⅲ. 生き物

・牛による事故

牛による事故は、地域的には北海道や岩手など酪農地帯で多く、女性の事例が多いのも特徴である。事例内容は、受傷者から聞き取ったものである。事例は10例である。

NO1（平成19年 4月16:30、牛舎、女・52歳）

牛舎内で搾乳後の事故。この日は「人工」（人口受精をする人）の方が見え、乳量などの検定が行われており、普段の手順と違っていた。主人が牛を搾乳する牛舎に追い込み、本人が搾乳していた。最後の乳牛の乳を搾っていたら、足がくぼみに入ってしまった。牛が倒れかかってきたので、コンクリートに上って逃げようとして鉄のパイプに額をぶつけた。



NO.1 金属の柵に頭をぶつけた。

ご主人が運転して病院を受診した。頭部のレントゲンを撮ってもらったが、次の日、痛みが出てきたので、脳神経外科を受診し、MRIをとり、「大丈夫」といわれ、安心した。落ち着くまで1か月かかった。

牛は小さいので500kg、大きいのは600kgある。足かせを外すのを忘れてしまった。発情期の牛のために、気が荒くなっているなどの注意が必要であった。鉄パイプが角張ったものではなく、丸いものであったら軽症で済んだかも知れない。

No.2（平成23年 8月、パドック・柵、男・23歳、経験年数1年4カ月）

乾乳牛を離していたパドック・柵の中に入って、出産間際の乳牛を独房舎に入れようとしていたところ、別の牛が走ってきたので、急いで柵をくぐって逃げようとしたが間に合わず、柵と牛の間に挟まれた事故。元々、その牛（初産）は被害者（経験年数1年4か月）に対して日頃から攻撃的な態度をとっていたため、用心していたが間に合わなかった。

腰部と背部を軽度打撲したため、近所の開



No.2 事故現場のパドック(柵の中)

業医で診断を受け、湿布薬を処方された。

神経質な牛は必ずいる。事故を起こした牛はとくに気が荒いが、経営者にはおとなしい。人による好き嫌いがある。搾乳中や牛床清掃中に足を踏まれることは珍しいことではない。気をつけるようにしているという。

No. 3 (平成23年 6月、牛舎、女・49歳)

搾乳作業中、搾乳を終了した牛がパイプラインミルカのエアホースをいたずらして抜いたので、そこから埃を吸い込んでは大変と思い、慌てて駆け寄って牛が並んでいる間に入ってエアホースを接続した。その牛を大声で叱って叩いたところ、牛が尻を振って被害者の左足を踏んだ。普段は踏まれるときは真上から踏まれて真上にどけるので大事には至らないが、そのときは踏み方がこするようだったので、負傷がひどくなった。足の甲を2カ所骨折した。



その日は1番草収穫作業の初日の朝だったので忙しかった。10日くらい湿布を貼ってがまんしていたが、症状が回復しないので、病院に行った。骨折と診断されたが事故後の日数が経っていたので処置できなかった。痛みが取れるまで約2カ月を要した。今でも疲れてくると痛む。

No. 4 (平成23年 7月12時頃、牛舎、男・49歳)

牛と牛の間に入って敷料（敷きわら）をフォークでならしていたら、突然、背後の牛が被害者の右肘にぶつかり、その拍子にフォークで被害者の左足親指を突き刺した。フォークは長年使っており、コンクリートの床に擦れるうちに細く鋭くなっていた。



すぐに病院へ行き、処置。破傷風の予防接種も受けた。4、5日通院した。

その他にも、初産牛の発情を発見したので、その牛にモクシ（牛の頭に装着する引き縄）をかけたら、嫌がって蹴られた事故なども経験している。また、初産で蹴る癖がある牛には蹴り防止器具を付けると、そのうちに慣れて蹴らなくなった、という。

No. 5（平成23年 8月、フリーストール牛舎、男・24歳、経験経験 1年4カ月）

分娩を終えた牛（初産牛）にモクシを付けてフリーストール牛舎に連れて行く途中、暴れて乾乳牛舎とフリーストール牛舎の間に走って逃げた。右手で引き縄を持ったままだったので、つられて走ったために転んだ。牛が止まったので起き上がって、牛がそれ以上遠くに行かないようにフリーストール牛舎の窓のポールを左手で掴んだが、再び牛が動き出したので、前のめりに転んだときに牛の後ろ足に顔面をぶつけた。



朝の搾乳作業終了後、午前9時半頃に病院に到着し、レントゲン撮影した結果、骨折と診断されたが、3日後に再検査の結果骨に異常はなかったため、以後の通院処置はしていない。

その後、現場の通路には脱走防止用の柵が新設された。



No. 6（平成23年 7月18時頃、牛舎、女・53歳）

事故当時、左足のふくらはぎの腱を切ってしゃがむことが困難であった。そのため、搾乳前の乳頭清拭を牛と牛の間に入って中腰の姿勢で行おうとして手を牛の乳房に伸ばしかけた瞬間、後ろ足で被害者の左腿外側部を腰のあたりから膝にかけて蹴り下ろした。

事故後1週間がまんしていたが、痛みが引かないので病院でレントゲン撮影をしたが骨には異常が認められなかったが、痛みがひどいので他の病院で



MRIで検査を受け、翌日に入院した（51日間）。膝は曲がるが力をかけると痛むので床に座れない。しゃがめないので今も搾乳作業はやっていない。

搾乳中も牛をなでたりするなど、普段からスキンシップは欠かさない。おとなしい牛がほとんどであり、事故時の牛もふだんはおとなしく、これまでも蹴ったことがないので、なぜあの時に限って蹴ったのかわからないとのこと。

No. 7 (育成牧場、事例多数)

現在は、乳牛の育成牛800頭と肉牛の繁殖と肥育を200頭行っている。現在までに施設は更新されてきているが、作業の実態を十分に把握できずに設計された施設もあり、重大事故には至らないものの牛との接触事故は少なからず生じているという。

比較的新しい肥育牛舎で、パドック清掃の際には、中の肥育牛を通路向かいのパドックに移すのだが、パドックの通路側出口には高さ20cmほどの敷居が設けてあるため、牛の移動が困難になっている。肥育末期の牛は高さ20cmの敷居をまたぐことさえ困難な状態になることが設計段階で認識されていないことが原因となっている。さらに、通路のコンクリートの表面は滑らかなため、牛が滑ることを怖がり、通路に出ることを嫌がって暴れることもしばしばであるという。本来、肉牛は柔和であり、人に攻撃的な行動をとることはめったにない(種牛は別)とのことであったが、体重が重く、力が強いため、嫌がったり恐れたりしたときにとる回避行動を作業者が制御するのは困難になる。

また、この牛舎の柵には、牛舎入口方向にこそマンパス(人の出入り口)が設けられているが、通路に面した柵にはない。そのため、作業者は姿勢を低くして柵をくぐる必要があり、くぐっている途中で牛に体を寄せられたり、ぶつかられて挟まれることがしばしばあるという。作業の実態を把握して、設計することが重要である。



No. 8 (平成21年10月、15時頃、 牛舎隣りのパドック、男・76歳)

繁殖用牛3頭と親牛をパドック内の柱に繋いでいたが、牛舎に牛を戻そうとした。最後の子牛(約300kg, メス)を柱に縛り付けていた綱を解こうとしたとき、後背部からマウンティングされ、パドックの長木に胸を打ちつけた。この時、1人で作業していた。



奥さんが見つけた時は、立っていたがその後しゃがみ込んでしまった。おしっこに血が混じっていたので、病院に息子運転の車で駆けつけたが、高次救急センターに行くよう指示され、救急車を呼んでもらい受診した。かなりの大けがで腎臓、肋骨骨折（10本）であった。

当該の牛は、通常時からうるさい牛であり、いつも最後に牛舎に入れるとなるとよく暴れた。注意はするべきであった。

No. 9（平成23年10月 6時半頃、牛舎、女・53歳）

搾乳後、パイプラインミルク、ティートカップを外そうとした際に乳牛に後ろ足で払われ、左手を踏まれた。左手指（中指、薬指、小指）を損傷。薬指、小指は切り傷で中指は爪がはがれ一部骨が見えるほどだった。

すぐには病院には行かず、搾乳作業をすべて完了させてから（約20分）、自分で自動車を運転して片道10分の病院へ行った。作業時は新品の搾乳手袋（ゴム手袋）をつけていたため化膿などはなかった。

その後10回通院し、現在は治癒（中指の爪はまだ半分しか戻っていない）。後遺症はないが意識して左手は使わないようにしている。共済・労災保険は恥ずかしいという思いがあり使用しなかった。



No.9 牛にティートカップをつけているところ

No. 10（平成21年6月 20時半頃、牛舎、男・54歳）

夜（20:30）、牛の搾乳中、足を上げる牛だったので胴締めをして乳搾りをし終わった後に乳頭が炎症を起こさないように、スプレーで後の両足の間からデッピングを後からかけていたとき、牛が後方向に足を蹴りあげた。中腰状態だったので、ちょうどその位置に頭があり蹴られた。

牛は主に、横に倒れ込んだり、横に向かって蹴飛ばしたりするのだが、真後ろで作業をしていた作業者を蹴ってきた。

事故後、電話で妻に迎えにきてもらって、家に帰った。夜も遅かったので救急車を呼んだ。硬膜下出血はしていなかった。ゆっくり休みたかったが乳搾りがあり、1日だけ入院した。事故後はなるべく、牛に近寄らないで作業をするようになった。



No. 10 牛舎内の様子

これらの事例以外にも、対象者の方々からは以下のような事故やヒヤリ・ハットがあったという。

- ・人工授精する際にしっぽを持っているときに足を踏まれた。
- ・発情牛が人に寄ってきた。
- ・肉牛の去勢作業中、突然牛が左足で蹴り上げた。
- ・肉牛の種牛の精液をとる作業中、蹴られた。
- ・乳牛も肉牛もトラックに乗せる際に、モクシをかけるときに暴れた。
- ・臀部への筋肉注射のときに、頭部をしっかりと固定しないと、頭を振って暴れる。
- ・発情以外でも乗架行動をとることがある。

牛による事故には、予測可能なものと困難なものに分けられるように思われる。

また、牛が暴れるのは、ストレスや恐怖心が原因となっていると言われている。

今回調査した事例でも、繋ぎ飼い、フリーストール、放牧といった飼養形態の違いや牛舎環境、普段の牛との接し方、牛の健康状態等が間接的に影響しているものと考えられる。

事例のなかでも報告されているように、牛とのスキンシップがうまくとれていれば、牛のストレスも少なくなり、事故につながるケースも少なくなると考えられる。しかし、現在の経済的にみた酪農環境では、経営を維持するために多頭飼育にならざるを得ず、牛と愛情を持って接する時間がなく、牛の性格を分かって落ち着いて世話をすることができない状況にある。今後、これらの要因と事故との関係について明らかにする必要がある。

また、牛の事故を集積して、**牛の体や牛舎環境などの危険マップ、ハザードマップの作成**し、危険防止につなげることが必要と考えられる。